

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 24 日現在

機関番号：87106

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2012～2015

課題番号：24401020

研究課題名(和文) タイにおける異文化の受容と変容 13世紀から18世紀の対外交易品を中心として

研究課題名(英文) Reception and transformation of foreign cultures in Thailand; focusing on the foreign trade items of the 13th to 18th centuries

研究代表者

原田 あゆみ (Harada, Ayumi)

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部企画課・室長

研究者番号：20416556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、タイ内外地域間の結びつきを示すモノ、思想をできるだけ具体的にしていくことで、相互の関係をより明確に示すことを目指した。

交易品の調査研究では、これまで見過ごされていた文化財の正しい評価を行い活用に寄与することができた。特にタイにおける日本刀の受容のあり方と展開について明らかにした。また仏教美術においては仏教説話の受容と展開に着目した。スリランカの蔵外伝典から影響を受け、タイで流布したプラ・マーライ説話は、他地域に比べ弥勒菩薩が重要な役割を果たしている。弥勒菩薩の図像の特徴と諸要素を明らかにし、弥勒信仰の背景を探った。

研究成果の概要(英文)： This study aimed to verify the mutual relations between domestic and foreign cultures in Thailand. Its scope from 13 century Thai state has been established, maritime trade was up to 18 century was expanding dramatically.

As the trade item we focused on the transformation of Japanese sword that have been accepted into Thailand, this is the most intriguing category. In Thailand, there exist "Japanese style swords" that are based on the Japanese swords. And Thai Buddhist narrative art offers many Buddhist tales that were newly created and transmitted apart from the Pali Tipitaka. Among these, the legend of Phra Malai providing salvation from the sufferings of hell, which rivals the last of the Ten Jataka Tales in popularity. Also, Maitreya worship can be seen only in the sutras passed down in Thai culture, and it is worth noting that the Maitreya also plays an important role in the Phra Malai tale.

研究分野：タイ美術史

キーワード：文化交流 交易品 文化財 仏教美術

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで特にタイにおける古代彫刻を調査研究し、基礎データ集積を積極的に行ってきた。スコータイ、ラーナー、アユタヤの美術についても調査を進める中で、熱心な上座部仏教国として知られているこれらの地域、時代においても上座部仏教だけでは理解できない仏教美術が多く存在することから、成立の背景について研究する重要性を感じていた。

また、タイでは日本古美術の現存点数が比較的多いにもかかわらず、その実態はほとんど明らかにされておらず、現地からその価値を求められることが多々あり、悉皆調査をとおして個々の作品を正しく評価することも課題となっていた。例えば、従来、交易品としての日本刀が、タイ社会の中で権威の象徴として機能したことは知られてきたが、現存作例に即した詳細な調査は皆無だった。一方、日本に伝わったタイの文物についても、陶磁器、漆器、響銅鈸、更紗など、日本文化、特に茶の湯の中で新たな意味をもって長く伝えられてきたものは数多い。しかしながら、タイに伝わる日本美術同様、タイ美術としての正確な評価、情報は未だ十分に示されていないといえない。

2. 研究の目的

本研究は美術史的視点に立脚して、タイにおける異文化の受容とその展開を探り、文化交流の実相を浮かび上がらせることを目的とする。交易品、外来文化の影響を受けた文物に着目し、詳細な調査と正しい評価を行う。

3. 研究の方法

対象とする範囲はタイ人国家の成立した13世紀から、海上交易が飛躍的に拡大した15世紀から18世紀初頭とした。タイに伝わるタイ内外地域間の結びつきを示すモノ、思想を、できるだけ具体的にしていくことで、相互の関係をより明確に示すことを目指した。

その手段のひとつとして、交易品を取り上げ、そのものの文化財調査を行うとともに、社会の中でどのように受容され、また展開していったかに着目して研究を行った。また、仏教美術においては思想的側面を含む社会的背景がどのように変容し、またそれがどのように造形面に表出したかを提示するため、使用された経典等、関係する文献についての調査研究を行った。

4. 研究成果

(1) 仏教美術における説話の受容と展開

「タイの弥勒菩薩像—仏教説話にあらわされる弥勒の功德—」原田あゆみ

現在、タイで篤く信仰されている上座部仏教は、スリランカから伝わった。パーリ経典を継承し、釈尊によって制定された戒律を護

持する伝統的保守的な仏教として一般に理解されている。しかし、その仏教美術は、パーリ三蔵やその注釈書に記される「正統的」教義からだけでは理解することができない。長い歴史の中では上座部と大乘仏教、さらにヒンドゥー教の併立融合の時期もがあり、土着の精霊信仰は現在まで脈々と受け継がれている。1830年代後半のタンマユット派による復古的仏教改革でパーリ聖典が重要視されるまで、タイでは、パーリ語蔵外仏典や現地で新たに創造された仏教書による知識も流布されていた。仏教説話「プラ・マーライ」は、地獄や天界を遍歴することのできるマーライという名の尊者が、天界で弥勒菩薩に会い、弥勒菩薩の伝言を人間界の人々へ語るという物語で、タイのみならずミャンマー、カンボジア、ラオスなど上座部仏教国に流布している。

プラ・マーライ説話はパーリ三蔵に入っていない仏教説話にも関わらず、タイでは「マーライ経」として広く知られ、関係する貝葉写本はタイのほぼ全域の寺院に収められ、儀礼で読誦されたり、寺院壁画に描かれたり、その説話は人々の信仰を促す役割を担ってきた。特に、タイで流布したプラ・マーライ説話は、パーリ三蔵に説かれる以上に弥勒菩薩が重要な役割を果たしていることが、これまでも指摘されてきた。

そこで、本研究では、プラ・マーライ信仰の中で、弥勒菩薩はいかに絵画化、造形化されたのか。そしてタイにおいて、弥勒菩薩はどのように信仰されたのかを明らかにするために、プラ・マーライ信仰に関する弥勒菩薩の図像の特徴と諸要素を明らかにし、弥勒信仰の背景を探った。結論としては、プラ・マーライ説話に記される弥勒菩薩は、生前に善行をなし天界に生まれ変わった天人の中でも最も優れた菩薩として描かれていた。しかし、その姿について具体的な記録は見当たらず、タイにおいては天人形として描かれることが通例であった。僧形の弥勒菩薩像の成り立ちについては、史料が限られ不確定な要素も多分にありますが、マーライ尊者の図像との混淆が考えられた。

プラ・マーライ説話とそれに関わる作例を通して、タイにおける弥勒信仰の背景について検討したが、同地の終末論との関わりが今後の課題として残されている。また、天人形は王族の姿とも近似しており、宝冠仏造立問題とも関係し、従来の弥勒信仰観に見直しを迫るきっかけにもなった。荘厳された宝冠仏の造形が生み出された背景には、仏教と王権のあり方、蔵外仏典の広まりと発展、その解



プラ・マーライ折本写本 (タイ国立図書館蔵)

釈と信仰の方法などが複雑にからみあっていると考えられる。

「タイにおける従三十三天降下説話と遊行仏」小泉惠英

従三十三天降下の説話は、成道後の釈迦が亡くなった母のマーヤー夫人のために三十三天へ昇って説法し、天から三道の宝階をつたってサンカーシャへ降下し帰還するという内容である。仏伝の一齣として知られる本説話は、インドではパールフットなど古代初期以来、数多く図像化された。

釈迦の重要な事績にゆかりのある地は、早くから聖地として巡礼を勧められていたが、サンカーシャもこうした聖地のひとつとされた。グプタ朝のインドでは、従三十三天降下を含む釈迦八相の造型が定型化し、以後パーラ朝にも引き継がれた。ガンダーラ美術において仏伝美術は内容の細分化や多様な図像表現など大きな進展をみせたが、その中でも従三十三天降下は釈迦の主要な事績として、時代を超えて愛好されたのである。

東南アジアの仏教美術に目を向けると、本主題はミャンマー（ビルマ）ではパガンの仏伝壁画の遺例がよく知られている。タイでは、スコタイ王朝時代以後の上座部仏教において、この説話の重要性が増していることがうかがわれる。なかでもタイ独特の発展を遂げた遊行仏（経行仏）の流行と本説話の関連については、これまでもさまざまな議論がある。

本プロジェクトでは、タイにおける従三十三天降下説話の受容と展開の様相を探るため、タイ各地の遺構や寺院などで現地調査を行なった。中でも三界図と従三十三天降下の組み合わせられたワット・スワンナラームの壁画は、注目すべき作例といえる。



ワット・スワンナラーム布薩堂の三界図

本寺院の布薩堂内には、十本生と三界図の壁画が描かれる。壁画はラーマ1世時代の制作であるが、ラーマ3世時代に修復されている。ラーマ3世は王家の2人の画師を登用した。一人はトンユウ（Thongyoo. Luang Vichit Chesada）というタイ人。今一人はコンペ（Khong Pae. Luang Seni Borirak）という中国系の人物で、それぞれの画風に特徴があり、特にコンペのそれは中国画を思わせる。

布薩堂の主尊の背後の南壁全体に三界図が描かれ、ここに従三十三天降下の場面が組み合わされている。三界図と従三十三天降下の組み合わせられた本図から想起されるのは、三十三天での説法の後、まさに降下せん

とする場面の釈迦の所作である。「仏陀は上を眺めては、梵天の座まで明かに見透し給ひ、下を眺めては地の底を透して無間地獄までも眺め給うた」（『ビガンデー氏緬甸佛傳』赤沼智善訳、1914年、283頁）。まさに説話の中で釈迦が目にした光景を、タイの三界図と従三十三天降下の複合した作例において目の当たりにすることができた。

(2) タイにおける日本刀の受容と展開

「タイにおける日本系刀剣について」末兼俊彦

海外交易の盛んだったアユタヤにおいて受容された日本刀は、その束や鞘を美しく装飾し上層位の持物として伝わっただけではなく、実際の戦闘に用いられたのち、威信財として刀身そのものが彩色され祀られていた例（16世紀後半・美濃製）や、外装だけではなく刀身自体も日本刀を模してタイで作られたものが多数あることも明らかになった。このことは、交易品としての日本刀が、タイ社会において深く受容され、権威の象徴としての「日本刀」が新たに創造されていたことを示す。

さらに、この傾向はチャクリー王朝、特に19世紀に入ってからも顕著であり、「日本刀」は、地方に上層位役人が赴任する際に下賜されたり、国外の最高権威者への贈答用として用いられたり、近代においてはさらに新しい意義が与えられていた。近世にはじまる日タイの文化交流から生まれた伝統・慣習が、近現代においても生きている。

本研究では、作例に即した詳細な調査を行った。タイにおける日本刀の受容は、以下の3つの時代に分けて考えることができる。このうち最も初期に位置付けられるのが、16世紀後半から朱印船貿易が収束する17世紀に掛けてである。第2期は、20世紀前半まで下る。即ち、タイに駐留した旧日本陸軍の携行武器として、大量の軍刀がタイ国内に持ち込まれたことが要因である。佩環一個が特徴的な、いわゆる「九八式軍刀」（昭和13年制式）に代表されるこの時期の軍刀は、第二次世界大戦終結に伴い旧日本陸軍が武装解除したことにより、大量に現地に残置されたものと考えられる。そして、第3期が、現在（21世紀）である。骨董品や古美術品として近世以前の刀剣が輸入されているのではなく、タイ国内の工房において、タイ人鍛冶工の手で新規に「日本刀」が製作されている。

本研究では特に、第1期に受容された日本刀に注目して調査を進めた。実際に16世紀に遡る日本刀は管見の限り、現存例がほとんどない。にも拘わらず、タイでは「日本刀」として伝わっている作例がかなりの数現存しており、実際に詳細な調査を行ったところ、日本よりもたらされた日本製の刀剣をもとに、タイ国内で日本刀を模した刀剣＝日本系刀剣が製作されていたことが明らかになった。タイ製日本系刀剣には二つの段階があり、

1、日本製の刀身にタイ製の外装を誂えたもの。2、タイ製の刀身にタイ製の外装を誂えたものがそれである。両者に共通してみられる特徴として、鐔の櫃孔や鞘の栗形、返角など用途に起因する部位が実用性を失い、痕跡器官として残存している点が指摘される。これはタイの工人がこれら各部位の本来の機能を正確に理解していなかったため、模造の過程で単なる装飾として製作されたためである。

上記の日本製刀身にタイ製の外装をあつらえたものとしては、タイ王室に伝わった日本刀を例としてあげることができる。七宝装のものは最も位が高く、王ないし王太子のみが所持し即位に臨んで佩用したとされるものである。



七宝装鞘刀拵（タイ王室財産局蔵）

拵は、木胎の鞘全面をタイ風の花弁文を七宝装で彩っている。鞘の差表には別造りの栗形と返角を取り付けて金剛石を散らすすが、両者の間隔が狭く、取り付け位置も鞘側面の中心線に近いため帯留としての本来的な機能がいきていない。そのほかにも、見た目には日本製の拵と同様だが、機能性を欠く部位が認められ、日本のものを模してタイで製作されたものであることが判明した。

タイ国内にはこの他にも相当数の日本刀・日本系刀剣が存在している。また、タイ国内での威信材としての使用例だけではなく、外交上での重要な品物であった可能性も浮上している。

(3)そのほかの研究成果について

本科研において、以下のような調査研究を行った。以下は研究協力者によるものである。

- ・ 續 伸一郎「タイと堺の交流について—15世紀から17世紀の文物受容を中心として—」
- ・ 佐藤留実「茶の湯と東南アジア美術」
- ・ 藤田励夫「安南日越外交文書にみる17世紀前半の日タイ交流」
- ・ 望月規史「タイにおける「日本刀」製作工房について」
- ・ 猪熊兼樹「大嘗祭におけるスダラント文化の要素」
- ・ 山田均「仏教における日タイの人的交流」
- ・ 小西郁「端物切本帳画像一覧作成と画像のデータベース化について」

本科研によって見えてきた課題を受け、現

在「日タイ間の文化交流に関する資料集成と統合的研究」と題し、多分野の新たなメンバーも加わり研究を継続している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1件）

- ① 末兼俊彦、名物「島津正宗」について、学叢、査読有、37号、平成27年、65-76

〔学会発表〕（計 3件）

- ① 原田あゆみ、文化遺産と考古学—タイ、東南アジア学会第89回研究大会、平成26年6月2日、鹿児島大学

- ② 原田あゆみ、小泉恵英、Intercultural and Comparative study of Buddhist narrative art, Japan and Thailand Beyond Boundaries—Understanding Two Countries' Cultural Relations through Antiquities and Living Museums, National Museum Bangkok, 平成25年1月30日

- ③ 原田あゆみ、佐藤留実、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本の包裂について、大谷大学真宗総合研究所公開講演会（招待講演）、平成28年3月17日

〔図書〕（計 1件）

- ① 末兼俊彦 共著（監修：稲田和彦）、日本の美—日本刀、学研パブリッシング、平成27年、259頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田あゆみ (HARADA Ayumi)
九州国立博物館・学芸部企画課・室長
研究者番号：20416556

(2) 研究分担者

小泉恵英 (KOIZUMI Yoshihide)
九州国立博物館・学芸部・部長
研究者番号：40205315

末兼俊彦 (SUEKANE Toshihiko)
京都国立博物館・学芸部企画室・研究員
研究者番号：20594047

藤田励夫 (FUJITA Reio)
九州国立博物館・学芸部博物館科学課・
室長

研究者番号：00416554

(平成24年4月～平成25年7月まで分担者
として参加)